

76 中ノ沢こけし

中ノ沢は古くからの温泉で、大正三年以降木地製品を扱う土産物店や木地工場ができ、遠刈田系と土湯系の工人が数多く出入りしました。土湯系の工人で、宇都宮生まれの(故)岩本善吉・芳蔵親子は大正十年から中ノ沢に住み、盆や茶壺などを作っていました。2年後にはこけしを手がけ、大きな目と鼻・目の回りを赤く塗る「たこ坊主」と愛称されている独特のこけしを作りました。現在もその流れを継ぐ工人が町内に在住しています。(故)本多信夫は芳蔵の木地に描彩をしていましたが、昭和十年ごろからこけしを作り始め、戦後は岩本芳蔵について木地修業をした養子洋と共に一重臉の可愛い表情で、胴に牡丹の花を描く独自の型のこけしを作りました。瀬谷重治は製材工として働いていた昭和二十八年、職人仲間の芳蔵に弟子入りし、善吉型のこけしを作り、昭和四十七年からは長男幸治も父について木地挽修業をし、面描鋭く気迫が感ぜられる善吉型のこけしを継いでいます。柿崎文雄は昭和三十九年から木地修業し、鳴子系の高亀型こけしを作っていました。四十二年に芳蔵の許可を得て善吉型を作るようになりまし。また町外在住の「善吉型」こけし職人としては、渡辺長一郎(郡山市)、斉藤徳寿・良寿(会津若松市)らがいます。(敬称略)



(故)本多信夫作品たこぼうず



こけしを挽く本多洋氏

77 いなわしろの民話

猪苗代町には「足長・手長の物語」・「弁慶の硯石」などの昔話や伝説が、現在200余話ほど残されています。これらの民話が埋もれてしまわないように、昭和五十四年には『いなわしろの民話』(全3巻)が出版されています。

「片目の爺さま」

昔磐梯山の麓の村に爺と婆がつつましく暮らしていました。さて、ある日暗くなってから、山さ行った爺が帰ってきた。出迎えた婆が、ふと爺の顔を見ると、たまげてしまった。爺は左の目がつぶれている片目なのに、今夜は左の目だけらんらんと輝かせて、右の目はしょんぼりくぼんでいるではないか。「ははあ、これは狐が爺に化けてきたんだなあ」と、婆はすぐ気がついた。それでその爺に「爺また酒に酔って帰ったな。酔わずどいつもの癖で俵さ入って寝んだべえ」と、爺は「文句つけねえで、俵布団だせ」って。俵さ入って寝っちゃまった。「めんどくせえなー、縄でしばんのが」ったら、俵の中から眠そうな声で「うだー」そして、ころよさそうに婆に縄をかけられた。「縄かけたげんど、火棚の上であつたまんのがー」って言ったらこっくりした。

婆は力を振り絞ってがらに、俵の爺を囲炉裏の上の火棚にかつぎ上げて、動かぬように火棚に縛ったと思うと、表から生松葉をおこんできて、どんどん下からいぶした。いぶされと、化けていても狐はついにしっぽ出すって、長いしっぽをよー。

そこさ、今度は右の目輝かせて、本物の爺やが帰ってきた。左と右をとちがえて化けたばかりに、狐はキツネ汁にされて人間様に食われてしまった。

